

生産

あってもなくてもよいものが溢れている
この世界全体がどうしてもよいものに思える
そのような中で生き続けることは
苦痛でもなく、快樂でもなく、ましてや
義務でもなく、ただの力学的法則に過ぎない

目の前にある四角い箱
そこに隠されているものが
餌であるのか、異性であるのか
それを知ることへの抑えきれない衝動
生とは、そのようなものではないか

その箱を開けてみる——すると
転がり出てきたものは私自身だった
果てしのない対話を続けようと
薄ら笑いを浮かべながら提案する
まぎれもない私自身

夜空を彩り、瞬く星々
その下にひしめき合う家並み
その中で営まれている生活
監視され、制御されることによって守られている
錯覚によって構成されているもの

死なないために用意されたもの
それらを得るための対価として隷属する
ひたすら塗りつぶすために用意されたもの
巧妙に笑いを振りまくコマーシャルリズム
「神の見えざる手」は健在だ

文化というものは余剰の中から生まれ
そして余剰の中に消えてゆくものだ
選ぶことができなくなった我々にとって
どうしてもよいものの生産を止めることは不可能だ
それらに埋もれ、窒息するまで

(2011.8.24)